

雲仙岳と生物多様性①

●森林と草原～ミヤマキリシマ群落との意外な関係～

雲仙岳は、春はミヤマキリシマのピンク、夏はヤマボウシの白や緑、秋は紅葉の黄色や赤、冬は霧氷の白銀と、山々の樹木が衣替えしながら四季折々の色彩を見せてくれます（「雲仙岳の四季彩」ご参照）。その樹木のイメージもあるためか、“豊かな森林”のイメージが強いようですが、実はかつて、雲仙岳の山間部の平地や斜面には、広大な草原が広がっていました。温暖湿润な日本では、草原は放っておけば森林へと遷移してしまいましたが、阿蘇を代表とする日本各地の草原は、野焼きや放牧、草刈りといった農業の営みによって遷移が抑えられ、維持されてきました。ここ島原半島では、平安時代から牛の放牧記録があり、江戸時代には、農繁期に活躍する牛馬が夏の期間は山々へ放牧され、草をはむ、というシステムができあがっていました。牛馬が放牧され、樹木の生育が抑えられると、シバやススキの草原になりますが、葉に毒があつて牛馬が好まないミヤマキリシマは、放牧草原の中で一大群落を形成します。現在、ミヤマキリシマ群落が見られる仁田峠や池の原は、かつての放牧地でした。



仁田峠・妙見岳のミヤマキリシマ群落



池の原のミヤマキリシマ群落（○内：国指定天然記念物）
現ゴルフ場のエリアには、かつて馬が放牧されていた。
写真奥の矢岳や手前の野岳の斜面にも放牧され、現在の群落を中心にミヤマキリシマの大群落が広がっていた。



矢岳とミヤマキリシマ群落



池の原（空池原）の放牧馬



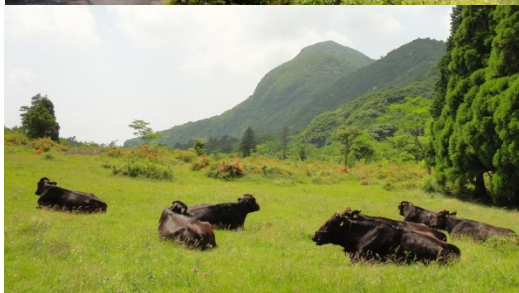
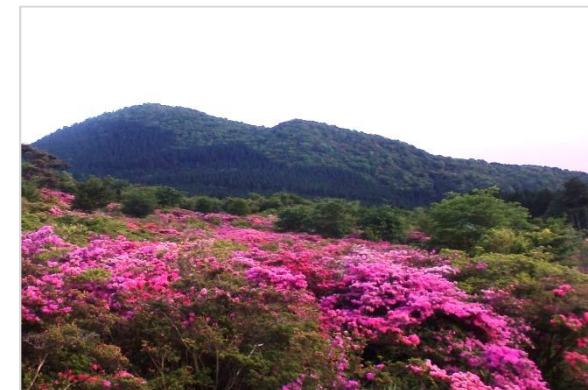
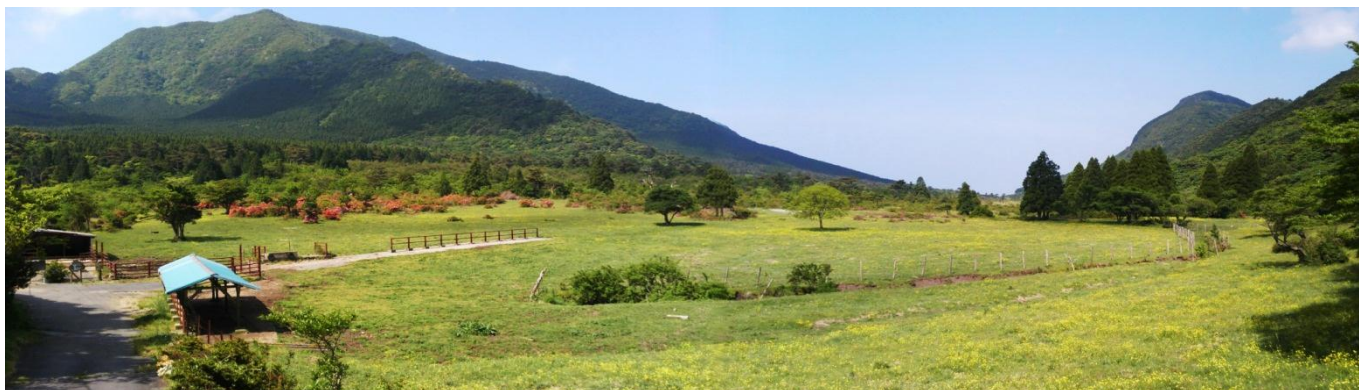
明治～昭和初期には、絹笠山の
周辺一帯で羊も放牧されていた。絹笠山麓（札の原）の放牧羊

雲仙岳と生物多様性②

●牛馬と草原とミヤマキリシマ群落

古くから農作業用の牛馬の放牧が盛んだった島原半島では、江戸時代には島原藩主が体質強健な地域ブランド“島原馬”の生産に力を入れたこともあり、雲仙岳の山間部には牛馬が草をはむ草原とミヤマキリシマの群落が一面に広がっていました。島原藩主が野焼き禁止令を出すようになって以降は、草原の維持が難しくなり、草原は減少していきましたが、雲仙岳が国立公園の指定候補に内定した昭和7年の時点でも半島全体で約2635haの放牧草原が残っており、ミヤマキリシマ（＋ヤマツツジ）の群落も約880ha残っていました（飼育概数：馬8000頭・牛7000頭）。ところが、昭和9年の国立公園指定を前に多くの地域で放牧が停止され、指定直後から草原・ミヤマキリシマ群落のヤブ化が一気に進行し、昭和55年には約40ha（約5%）まで減少してしまいました。指定の当時、“観光と農業（畜産業）は両立しない”という考えがあったようですが、実は農業あつての観光だったのです。

現在、その当時の面影を残している場所が奥雲仙・田代原高原です。放牧牛と草原とミヤマキリシマ・ヤマツツジ群落のセットが見られます。JA島原雲仙が放牧する黒牛（肉用牛）による“草刈り”と奥雲仙の自然を守る会による保全活動で維持されています。仁田峠や池の原、宝原のミヤマキリシマ群落は、長崎県や雲仙を美しくする会の下草刈り等の保全活動で維持されています。



たしろばる
田代原高原の放牧草原とミヤマキリシマ・ヤマツツジ群落
江戸時代から終戦までは馬、戦後は牛を放牧。フン虫も生息。
近年の放牧頭数減少に伴い群落も減少。現在、
被圧木の除去により群落を再生中。

ほうばる
宝原のミヤマキリシマ群落
国立公園指定当時は250ha（現在の約100倍）
あり、写真奥の高岩山の背中はピンク色に
染められていた。

※ミヤマキリシマの保全活動に興味関心を持っていただける
観光客や市民の方々のボランティア参加を歓迎しています。